

幼児期までの学びと育ちを生かしたスタートカリキュラムの実現に向けて  
—保育所訪問を手掛かりとして—

高橋 浩司

(愛知教育大学教職大学院 教育学研究科)

Toward the implementation of the start curriculum that make use of learning and the breeding until childhood

-Using visits to nursery schools as clues-

Koji TAKAHASHI

(Graduate Student, Aichi University of Education)

## I はじめに—問題の所在—

文部科学省は、「幼保小の架け橋プログラム」について、令和4年度からの3年間、架け橋期のカリキュラムの開発や実施等に取り組む19の自治体を採択し、選ばれた各自治体で様々な取組が行われている。文部科学省は『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)』の中で、「スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、理念が共通していない」「小学校側の取組が、教育方法の改善に踏み込まず学校探検等にとどまるケースが多い」とこれまでの幼保小連携の課題を述べている<sup>1)</sup>。そして、この課題をうけ、「幼児期から児童期の発達を見通しつつ、5歳児のカリキュラムと小学校1年生のカリキュラムを一体的に捉え、地域の幼児教育と小学校教育の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善にあたることを推進」「3要領・指針、特に『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』の正しい理解を促し、教育方法の改善に生かしていくことができる手立てを普及」と架け橋プログラムのねらいを述べている<sup>2)</sup>。

また、「幼保小の接続期の教育の質的向上に関する検討チーム」は共通の視点から幼児教育と小学校教育がつながる工夫の一例として「幼児教育関係者と小学校教育の関係者が共通理解することが必要ではないか」「一人一人の育ちと集団としての育ちについて、小学校の先生と共有していくことが大切ではないか」と述べている<sup>3)</sup>。

そこで、ねらいに迫るために重要となってくるのがそれぞれの教育の様子を知り、幼保小をつなぐためにコーディネートする教員の存在である。これまで、

小学校教員が幼稚園に勤務し、園の様子を理解するという人事交流が行われた先行事例は様々な都道府県で行われてきている。大阪府の事例では小学校から幼稚園へ異動した教員が学んだこととして「幼稚園での遊びが小学校の学びにつながっていること、環境を通して行う教育、友達関係などの人間関係づくり、学級の枠を超えた全職員での子どもの援助と指導という幼稚園の指導体制」という4点があげられている。人事交流によるこれらの学びは、架け橋プログラムのねらいとしているカリキュラム・教育方法の充実改善につながるであろう。

筆者は令和4年度、様々な保育所・幼稚園・認定こども園を訪問した。訪問する中で、それぞれの役割の違いはあるにしろ、保育者の子供に対して手立てを講じる姿が見られ、子供たちがいきいきと遊ぶ姿は変わらないものであった。

また、「幼保連携型認定こども園」や「幼稚園」と並んで、2018年施行の保育所保育指針では第一章総則に「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」と明記された。これまで、保育所、幼稚園の指針となるものはそれぞればらばらに作成されていたが、ここで初めて保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園の教育・保育要領の3つが整合性を確保し、幼児教育に関する記載がほぼ足並みをそろえた内容へと変更された。

汐見は資質・能力を育てることを課題とする教育改革について触れたうえで、「教育改革の方向と幼児教育の改革の方向を一致させるために(中略)整合性が図られました。その結果、保育所も日本の教育

改革の一端を担うことになった<sup>4)</sup>」と整合性が図られたことによる保育所の役割について述べている。

整合性が図られたことで、これまでより保育所での保育の様子を知ることが保小の接続により有効なものとなってくるのではないか。2018年施行の保育所保育指針では、資料1に示した小学校との連携の内容が記載されている。

#### 資料1 2018年施行保育所保育指針 第2章 保育の内容

#### 4 保育の実施に関して留意すべき事項

##### (2) 小学校との連携

ア 保育所においては、保育所保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通じて、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。

イ 保育所保育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、第1章の4の(2)に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、保育所保育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めること。

アについて「発達や学びは連続しており、保育所から小学校への移行を円滑にする必要がある（中略）小学校に就学するまでに、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うことが重要である

（中略）さらに、共に協力して目標を目指すということにおいては、幼児期の保育から見られるものであり、小学校教育へとつながっていくものであることから、保育所の中で共同して遊ぶ経験を重ねることも大切である」と小学校教育につなげるために留意すべきことが記されている。

イについて「子どもの発達と学びの連続性を確保するためには、『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を手がかりに、保育所の保育士等と小学校の教師が共に子供の成長を共有することを通して、幼児期から児童期への発達の流れを理解することが大切である（中略）」と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を生かして保小の教員同士が子供の成長を共有することの大切さが記されている。

これらの文章から、保育所の保育者たちは小学校を意識して保育を行うように示されていることがわかる。その一方で、小学校教員が保育の現場に実際に赴き、保育の様子を観察したり、保育者と子供の成長を共有したりすることがより一層重要となっ

くる。電話や要録だけで子供の様子を伝えてもらうのではなく、実際に保育の現場を見に行き保育者と話をしながら子供の様子を見取ることが接続や連携に重要になってくるであろう。

酒井は教員同士の交流について「この課題については、幼稚園と小学校との交流に関する事例報告がほとんどであり（中略）保育所と小学校との交流事例を紹介することができなかった<sup>5)</sup>」と小学校と保育所の教員同士の交流がまだまだ行われていないと述べている。

令和4年度も様々な自治体で小学校と保育施設の人事交流が行われているが、幼保小の人事交流を積極的に行っている広島県の令和4年度の小学校からの交流は3名で、3名すべて幼稚園へ交流するという形である。令和元年度から令和4年度まで4年間の実績を見ても、9名の交流者のうち、幼稚園8名、保育所1名となっている。他の自治体を見ても保育所との人事交流は積極的に行われていないのが現状である。

酒井は「保幼小連携を進める上で、今後さらに検討すべき課題の1つは、保育所と幼稚園の差異をどう踏まえるかである<sup>6)</sup>」と述べている。

だが、保育所保育指針の改定により、幼稚園やこども園との幼児教育に関する記載の整合性が図られたことで、保小の交流により学んだことを接続に生かしやすくなっていると考えられる。

## II 研究の目的と方法

### 1 研究の目的

本研究の目的は、まだまだ進んでいない保小における教員同士の交流の有効性を明らかにすることである。保育所保育指針の改定によって、これまで研究が様々行われてきた幼小連携に加え、保育所との連携についてもますます重要となってくるからである。そして、保育所訪問を手掛かりとして幼児期までの学びと育ちを生かしたスタートカリキュラムの実現に向け、接続の視点を明らかにすることである。

### 2 研究の方法

本研究は保育における文献や先行研究をもとに行なった。

また、N市立I保育園の保育者、5歳児を対象とし、2022年7月～12月までの間18回の訪問を行い、保育者への聞き取りの記録や、子供や保育者の様子の記録をとった。児童の記録の際には観察場面や場所を限定しないように努めるとともに、子供たちを取り巻く様々な環境や周囲の状況も含めてできる限り総合的に記述する姿勢をとることにした。

### Ⅲ 保育者の子供に対する願い

#### 1 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

接続の視点の前提として、保育者の子供に対する願いについて述べていく。保育者が子供たちに対してどんな願いをこめて保育を行っているかを知らずに保育の様子を観察していても、理解も不十分になってしまうだろう。そこで、保育者の願いに焦点をあて考えていく。

『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）』の中で『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』は、子供に資質・能力が育まれていく過程で見られる生活の姿を総合的に示したものであり、同時に、資質・能力を育む先生や大人が、教育上の思いや願いを照らし合わせながら、一人一人の子供の様子を見定めていくことを通じて、子供の学びや生活の質を捉え、資質・能力がどのように育ってきているかを見出し、子供の実態に沿って主体的・対話的で深い学びの充実を図れるようにするために必要な手掛かりとして活かすことができるもの<sup>7)</sup>と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりとして子供を見取ることが子供の深い学びにつながるものと記されている。

汐見は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を育ちの視点や目標像と示したうえで「ここで『育ってほしい』と書き、『育てるべき』と書いていないことにまず注目すべきでしょう。到達するべきあるいはさせるべき目標ではなく、『育ってほしい』という保育者の側の願いが書かれている（中略）頭の中にそうなってくれるといいなあというようなイメージを持って保育をしてほしい<sup>8)</sup>」と述べている。

そこで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が保育者の願いということを踏まえ、どのように保育者が実践に生かしているかを見ることで保育者のイメージを感じることができるのではないかと筆者

が訪問している保育所の月案には「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10の項目が毎月示され、意識して作成されている。月案を見た後に実際に保育の様子を観察したり保育に参加したりしていると、保育者の願いやイメージが伝わってきた。たとえば、10月の月案には廃材を使った遊びの活動について「廃材の性質の違いを知り、いろいろな材料や用具を試したり工夫したりしながら作り進める様子を見守る。必要に応じてヒントになるような言葉をかけたり、イメージしたものができるよう手助けしたりする」と「豊かな感性と表現」の項目についての記載があり、子供たちの活動を見ているとペットボトルやヨーグルトのカップ、牛乳パックなどを用いて様々な色や模様で表した工作を行い、保育者のイメージした子供たちの姿として表れていた。また、家庭との連携について「季節の変わり目なので、体調について伝え合ったり、調節のしやすい衣服での登園をお願いしたりする」と「健康な心と体」の項目についての記載があり、迎えの際、保護者に家での様子と園での様子を伝え合う姿が見られていた。

このように、日々の様々な場面と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がつながっていることがわかった。そのため、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について小学校教員側も理解したうえで保育の様子を見ることで、保育者がどんなイメージをもって保育をしているのかをうかがうことができる。

#### 2 保育理念や保育方針、クラス目標

2018年保育所保育指針解説では「保育所保育は、本来的には、各保育所における保育の理念や目標に基づき、子どもや保護者の状況及び地域の実情等を踏まえて行われるものであり、その内容については、各保育所の独自性や創意工夫が尊重される」と記されている。よって、各保育所の保育理念を理解することが各保育所の園長先生の子供に対する願いを理解する方策の1つになるのではないだろうか。

筆者が勤務するN市の保育所でも市立・私立問わず各園の園長先生により設定された保育理念がある。また、保育理念に近づくため、どのような方向に進めばよいかを表した保育方針や子どもたちがど



のように育ててほしいのかという指標を示した保育目標が設定されている。筆者が令和4年度に繰り返し訪問しているN市立I保育園の保育理念・保育方針・保育目標について、資料2で示した。

#### 資料2 N市立I保育園 保育理念・保育方針・保育目標

##### 保育理念

保育所保育指針の趣旨を十分に理解し、乳幼児期が安定した情緒の下で、その時期にふさわしい生活の展開ができる環境を整え、生涯にわたる人間形成の基礎、社会変化に対応できる力の基礎を培うために、心身ともにたくましく健やかな子どもの育成に努める。

##### 保育方針

「元氣いっぱい！笑顔いっぱい！心かよわせて！」

○健康で安全な保育を基本とし、一人一人の個性を大切に愛情豊かな保育をする。

○職員一人一人が専門性の向上に努め、保育について共通理解を図り、発達段階に応じた保育をする。

○地域の実態を把握し、信頼関係を築きながら保護者支援に努める。

○異年齢の関わりを意識しながら、思いやりの心を育むように努める。

○津波対策を意識した体力づくりと防災意識の啓発に努める。

○地域の人々との交流を大切に、地域の人々に親しみを感じながら自分達の住んでいる地域に親しみや関心を持てるようにする。

○I小学校との連携・交流を意識し、滑らかな小学校への移行を図る。

##### 保育目標

「心身ともにたくましく 健やかな子ども」

- ・友達といきいき遊ぶ子ども
- ・考えたり、工夫したりして遊ぶ子ども
- ・人の話を聞いたり、伝えたりできる子ども
- ・優しさや思いやりのある子ども

これを受け、各クラス担任がクラス目標を設定している。同保育園の5歳児クラスのクラス目標を資料3で示した。

#### 資料3 N市立I保育園 5歳児クラスのクラス目標

##### K組

思いを伝え合いながら、同じ目的に向かって取り組む楽しさを感じる

##### Z組

一人ひとりが好きな遊びや得意なことをしていく中で、喜びや楽しさを味わい、自信へとつなげる

K組のクラス目標の「思いを伝え合いながら」という部分は保育目標の「人の話を聞いたり、伝えたりする子ども」という部分に通ずるものがあり、Z組のクラス目標の「一人ひとりが好きな遊びや得意なことをしていく」という部分は、保育方針の「一人一人の個性を大切に愛情豊かな保育をする」という部分に通ずるものがある。これは園長先生の願いが担任の保育者へつながり、園全体でビジョンを共有して保育をしているという表ではないだろうか。10月6日、昼休憩中に園長先生が5歳児担任に声をかけ、午前中の保育の一場面を切り取り、子供たちの心を育てるためにどんな声掛けや動きをしたらよかったかということ話を話されていた。こうやって園長先生からコミュニケーションをとり、職員同士の関係づくりが育まれているからこそ、園長先生の願いが担任保育者に伝わり、より充実した保育につながっているのではないかと推察される。

また、5歳児クラスの担任に10の項目に沿った姿が見られた事例を聞いた。例えば、K組担任は「協同性」の項目において、「砂場で、みんなで一つの山を囲んで砂を盛っていき、大きな山になったことを喜び合った」と述べていた。これはK組クラス目標の「同じ目的に向かって取り組む楽しさを感じる」という部分と合致している。Z組担任は、「豊かな感性と表現」の項目において、「曲の歌詞に合った振り付けを友達と一緒に考えて踊ることを楽しんでいく」と述べていた。これはZ組クラス目標の「好きな遊びや得意なことをしていく中で、喜びや楽しさを味わい」という部分と合致している。つまりそれぞれのクラスにおいて、保育者の子供に対する願いにそって保育を重ねるうちに、思い描いたイメージに子供たちの姿が具体的に表れていることが伝わってきた。

以上のことから、園の保育理念や保育方針、保育目標そしてクラス目標についても目を向け、子供の姿を見取ることが保育者の願いをつなぐことに重要であるといえる。

だが、保育者の願いをつなぐだけでは接続できないため、これを生かして、次章では接続の4つの視点について具体的に述べていく。

## IV 接続の視点

### 1 遊びの中での学びの体験をつなぐ

磯部は「遊びを通して、気付くこと、わかること、解決すること、達成することの喜びを十分に体験する（中略）就学前教育が、大切にしているのは、この『学びの体験』の充実である。小学校教育の学習は、この延長線上にあるものである<sup>9)</sup>」と遊

びの中での学びの体験の大切さを述べている。

これは、保育所で子供たちの様子を見ていても感じることである。10月に保育所で運動会があった。そして、種目の中にリレーがあった。子供たちは勝つためにはどんな順番で走ったらよいか、誰が2回走ったらよいかなど自分たちで話し合っている姿が見られた。メンバーを入れ替え、勝ったり負けたりを何度も繰り返す中で、自分のことだけでなく、友達のことも意識し、充実した話し合いができるようになってきた。他にも、発表会に向け、子供同士でどのような演技をしたらよいか話し合いながら完成度を高めていく姿が見られた。これこそが「学びの体験」の充実なのではないか。子供たちは様々な遊びを通して「学びの体験」をしている。しかし、意識して子供たちの様子を見ないと子供たちのことを見取ることは難しい。

つまり、小学校教員が保育所で遊びの中でこのような「学びの体験」をしている子供の姿を見取り、学びをつないでいくことが大切であると考えられる。

訪問した保育園で子供たちの外遊びの時間を見ると、それぞれが好きな場所で好きな遊びをして楽しんでいた。その中で筆者は砂場で遊んでいる子供たちに着目した。砂遊びでの教育的効果については幼児教育において様々な研究により明らかにされており、接続において重要であると考えたからである。

観察していると、子供たちは山を作ったり、穴をほったり、容器に砂を入れ料理を作ったりして楽しんでいた。数日間継続して観察していると毎回砂場で遊んでいる子供たちが何人もいることがわかった。その子供たちは終わりの合図がかかると夢中になって遊んでいた。砂場が子供たちにとっての居場所となっていた。子供たちに何を作っているのか問うと「一緒に山を作ろうよ」「私の作ったアイスクリームを食べて」と嬉しそうに話す姿が見られた。その姿を見ていると、大きな山を作りたいのだな、いろんな料理を作るのが好きなのだなど一人ひとりが興味あることが見えてくる。さらに、子供たち同士で協力して山を作る姿や、お互いに作った料理を食べさせ合う姿など子供同士がかかわって遊ぶ姿が見られた。それらの姿から砂遊びでの「学び

の体験」の効果が理解できた。

10月3日、A児が他園から5歳児クラスに転入してきた。クラスに入ったA児は保育者から離れず、不安そうな顔を見せていた。外遊びの時間、筆者はこれまでのように砂場へいくと、A児も砂場についてきた。そのときのエピソードを事例1で示した。

#### 事例1 砂遊びをするA児【10月3日】

(泥団子を作り始める筆者)

A児:おれもつくりたい。

(一緒に泥団子を作るA児と筆者)

A児:すぐくずれちゃうから大きくなならない。

筆者:ほかの場所の砂も使っていんだよ。

A児:ちょっと探してくる。

(他の場所の砂を集めてきて、大きな泥団子を作るA)

A児:できた!先生のより大きいでしょ。

筆者:大きい~。

B児:え、なにに。見たい。(泥団子を見て)わ~大きい!

筆者:大きいよね。

(嬉しそうな笑顔のA児)

B児:先生、ぼくはね、穴掘ってるんだけど見て。

(B児の掘った穴を見る筆者とA児)

筆者:すごいね。

A児:おれも掘りたい。掘るのどこあるの。

B児:あっちだよ。

(二人でスコップの保管場所に行き戻ってくる。二人で穴を掘り始める)

A児:先生も手伝ってよ。

(3人で穴を掘りある程度ほったところで片付けの時間)

A児:楽しかったな。またやりたいな。

B児:明日も一緒にやろう。

A児:うん。

(片付けて教室に戻るA児とB児)

B児:ブロックやろ。

A児:うん。

#### 【考察】

筆者の泥団子をつくる様子から自分もやってみようと思ひ、泥団子づくりにとりかかったA児。そして、筆者に「先生のより大きいでしょ」と出来上がった泥団子を見せるところから他者と関わって遊ぶ楽しさを感じている様子がうかがえる。また、自分の泥団子を認めてくれたB児に興味をもち、B児の行っている活動を一緒に行き、人間関係の輪が広がっていく様子が見られた。遊びを通じて、人間関係づくりについて学んでいるのである。

宗形は入学間もない子どもにとっての砂遊びにおける効果として「自ら動き出すことで学ぶ経験をずる」「人間関係・社会性の基礎を育む」ということに

ついて明らかにしている<sup>10)</sup>。今回のA児の別の場所から砂をもって大きな泥団子を作る姿は「自ら動き出すことで学ぶ経験をする」であり、B児にスコップの場所を尋ね、一緒に穴を掘る姿は「人間関係・社会性の基礎を育む」であるだろう。それだけでなく、砂遊び後にクラスでB児とブロックで遊ぶ姿は、宗形が示す砂遊びにおける効果の別の観点である「情緒を安定させる」という効果も表れているであろう。A児にどうして砂場に行ったのかあとで聞くと「先生がおったし、あと、前の保育園でもよく遊んでたから」と言っていた。転入前の保育園の砂場での「学びの体験」が心に残っていたから初めての外遊びで砂場を選んだのではないか。そして、A児が転入してすぐの砂遊びという状況は小学校の入学間もない児童の状況とよく似ているため、小学校でも砂遊びの体験の場を設定することは有効なものになってくるだろう。

また、設定するだけではなく、子供とともに遊ぶことの重要性についても気付かされた。そこで、このように砂遊びでの「学びの体験」のような具体的な姿でつないでいくことが必要であるといえる。

## 2 子供の生活をつなぐ

筆者が平成29年度に小学校1年生を担当していたとき、入学後の環境の変化による子供たちの不安により、落ち着いた生活が送れない様子を目の当たりにした。学校生活を送っていくうえで、徐々に小学校に慣れ、安心して過ごせるようになったが、年長段階でできていたことが、環境の変化や対応の違いによってできなくなってしまったのではないかと考えた。そこで、本節では生活の中の生活習慣に焦点をあて環境の変化や対応の違いを減らすためにどうしていったらよいかを述べていく。

登校後、朝の支度に戸惑い、声をかけないとなかなか支度が終わらないのが何日も続く子供を見てきた。しかし、訪問した保育園の5歳児クラスの様子を見てみると、どの子供も登園後、何も言われなくても帳面をだしたり、ハンカチをかけた、水筒を置いたりスムーズに支度を終わらせていた。もちろん、園での生活経験が長いこともあるが、支度がすべて狭い範囲で終わるように教室環境が工夫されていた。それに比べ、小学校ではいろんなところに

配置されており、やることも増える。これでは戸惑いを覚えるのも当然だと感じた。そのため、教室環境をできるだけ園の様子に近づけることは、子供たちの生活をつなぐうえで重要であると考えられる。

また、小学校ではチャイムで時間が区切られており45分たつと子供が学びに夢中になっているときでもいったんきりをつけてあいさつをし、終わらせることが多い。生活面で一番大きな変化はこの45分という時間で区切られることである。

子供の意思とは関係なく設定された時間で区切られるため子供が戸惑いを覚えるのは当然である。しかし、子供が見通しをもって活動をするのであれば、そのような戸惑いも減ることであろう。

保育の様子を観察していると、見通しをもって遊びができるように保育者が声をかけている場面があった。そのときのエピソードを事例2で示した。

### 事例2 B児への保育者の声掛け【11月10日】

T<13:45>:(クラス全体に向かって)おやつを6<14:30>の時間から食べるから4<14:20>で片づけね。(ホワイトボードに時計の絵を書いておく)  
(それぞれの遊びをする子供たち)  
T<14:15>:もうすぐ4だよ。  
(何人かの子供は声掛けに反応して時計をみる)  
C<14:20>:4になったよ。  
(Cの声に反応し片付けを始める子供たち。B児は遊び続ける)  
T:(B児のそばへ行き)4だよ。  
B児:おれもうちょっとブロックやりたい。  
T:いつまでやるの。6からおやつだよ。  
B児:じゃあ5まで。  
T:5になったら片づけるんだね。  
B児:うん。  
T<14:25>:5だよ。  
(片づけ始めるB児。14:30に間に合う。)

### 【考察】

保育者は次の活動が始まる時間を想定し、その活動に間に合う時間を片付けの時間として設定し、指示をしておく。すると大抵の子供たちは見通しをもち、時間に合わせて片付けを行う。自分で気づかない子も友達の様子をみて片づける。しかし、B児のように遊びに夢中で折り合いをつけられない児童もいる。そこで、保育者はB児に個別に声をかけ、「5まで」と自分で時間を決めさせる。自分で決めたことなので納得して片づけることができる。これは事前にB児のような児童も出てくることを想定しているからこそできる設定である。さらに、次の活動を



提示しておくことにより、なぜ片づけなくてはならないのが明確になる。そして設定された時間に間に合うことができた。

小学校でも、45分の授業時間で見通しをもてるようにすること、そして折り合いがつけるのが難しい児童への声掛けなどは行っていく必要がある。

そして、子供たちは夢中になると時間を忘れて活動することがわかった。そこで、何より子供たちにとって45分の授業時間が夢中となれる時間となるように授業を考えていく必要がある。

### 3 アプローチカリキュラムを有意義にする

『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）』の中で、「スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、理念が共通していない」という課題があった。

地下は「アプローチカリキュラムとは、保幼小の円滑な接続を目指し、小学校就学前の時期である幼児期に育てたい力を十分に育み、幼児期に適した教育の充実を図るためのカリキュラムである。小学校教育への単なる準備や、先取りのカリキュラムではなく（中略）幼児期に育てたい力を育み、小学校教育の土台となるカリキュラムである<sup>11)</sup>」とアプローチカリキュラムについて述べている。

汐見は「2つのカリキュラムは本来、双方が併せて作られることで意味を持ちます<sup>12)</sup>」と述べている。しかし、就学前の保育所・幼稚園におけるアプローチカリキュラムの取組は行事交流活動などの内容がほとんどであり、現任校でも同じような内容である。しかもコロナ禍により、交流の回数は極端に減っている。このような年数回の活動では小学校教育への単なる準備に終わってしまい、アプローチカリキュラムの意味を果たすことが十分にではない。

岡花は保育園における遊びを中心としたアプローチカリキュラム「学校ごっこ」の実践を研究としてまとめている<sup>13)</sup>。実践の概要は資料4の通りである。

この実践について岡花は「これまで保育所や幼稚園で行われてきたアプローチカリキュラムは、交流行事をはじめ実際の小学校へ出向き『学校で遊ぶ』経験だったといえるだろう。それに対して、本研究で検討してきた『学校ごっこ』実践は、子どもたち

#### 資料4 「学校ごっこ」の実践の概要

○小学校の先生役は保育者が務める。  
○内容は5歳児担任を中心とした話し合いの中に、小学校教諭である保護者や主任保育者も参加し考えた。  
<秋の「学校ごっこ」>  
実施時期:5歳児10月の1週間  
主な内容・箱の中身をあててみよう(話し合い)  
・集中して一つのものを描く(デッサン)  
・どれが飲みたいかな(実験)  
・パネルを使ってクイズ(左右上下と数の認識)  
<冬の「学校ごっこ」>  
実施時期:5歳児1月の2週間  
主な内容・ノートの説明、ひらがなに必要な線を書く  
・「小学校にいったら…」で始まる文を作り発表  
・プリントで考えてみよう(仲間同士を線で結ぶ)  
・チャームが導入され、保育者は様々な服装

にとって、現実の学校ではなく、想像世界の「学校を遊ぶ」経験である（中略）創造世界だからこそ、今の自分では無い『小学生としての自分』を演じ、学校の世界へと一歩あゆみを進めるきっかけになるのではないだろうか」と考察し、保育所で小学校を題材として遊ぶことは小学校へ進むきっかけとなることを提言している。

また、岡花は「実践の特徴は、保育者が先生役となったことにある。普段の子どもの様子をみているからこそ『学校ごっこ』のなかで背伸びして意気込んでいる姿に気づくことができたり、その後の保育のなかでフォローすることも可能である。このように保育園の日常との連続性のなかに『学校ごっこ』実践が位置づけられていることも利点の一つであったと考えられる<sup>14)</sup>」と利点について述べている。しかし、その一方で「A保育者は、たとえ遊びであったとしても子どもを指導したり、直接的に教えることに対する抵抗感があった。言い換えるならば、A保育者は『先生』になりきることに違和感を感じていた<sup>15)</sup>」と保育者の複雑な思いを述べている。

この実践により、学校を想像できるアプローチカリキュラムを行うことは小学校へのイメージを子供たちがもつために有効であるといえるが、保育者が行うことには課題があるということが考えられる。これは保育と小学校教育の違いもあるのかもしれないが、小学校のイメージをもっていない保育者が小学校教員になりきるということに無理がある。

筆者の勤務するN市では3月にそれぞれの園に養護教諭が出向き出前授業をしている。しかし、単発

のものであり、子供の様子もよくわかっていない中で授業となる。

そこで、保育者と小学校教員が協働してアプローチカリキュラムを行うということを提案する。小学校教員は保育の現場の様子を何度か訪問し、子供たちの生活の様子や発達の様子を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして見取ったうえで行うものとする。内容については、幼児期に適した教育の充実を図ることを目的とし、小学校教育への単なる準備や、先取りとならないよう、園の保育目標やクラス目標に沿ったものにするようにする。協力して行うことで学校をより意識でき、またその後の保育のなかでフォローすることもでき、アプローチカリキュラムがより有意義なものとなるだろう。また、小学校教員がアプローチカリキュラムに参加することでスタートカリキュラムと理念が共通することができるであろう。

#### 4 スタートカリキュラムに生かす

アプローチカリキュラムでの学びをスタートカリキュラムにつなげる際にどんなこと重視していったらよいのだろうか。

文部科学省は『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム』の中で、スタートカリキュラムをデザインする基本的な考え方として資料5にまとめた4点を示している。

##### 資料5 スタートカリキュラムをデザインする基本的な考え方

- ・一人一人の児童の姿からデザインしよう
- ・児童の発達の特性を踏まえて、時間割や学習活動を工夫しよう
- ・生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図ろう
- ・安心して自ら学びを広げていけるような学習環境を整えよう

基本的な考え方をもとにすることで、これまでの接続の視点とのつながりが見えてくる。「一人一人の児童の姿からデザインしよう」「児童の発達の特性を踏まえて、時間割や学習活動を工夫しよう」という点については、保育所訪問により、子供を見取った経験を生かして行うことができる。園での遊びの様子から一人一人の興味関心を見取ることで、子供の思いや願いの実現に向けた学習活動を工夫できるだろう。そして、「学びの体験」をつないだ授業になってくるだろう。「安心して自ら学びを広げていけるよ

うな学習環境を整えよう」という点については環境の変化や対応の違いを減らすなど子供の生活をつなぐことが重要となってくるだろう。安心感があることで子供は学校生活を楽しめることができる。不安を取り除くために、保育の現場との段差をなくすることが重要となってくる。

そしてもう1点の「生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実を図ろう」という点について地下は「スタートカリキュラムの編成において、中心となる教科が『生活』である。『生活科』は、教科の特性上、国語、音楽、図画工作、算数などの他教科等との合科的、関連的な指導を行うことが期待されており、新しい小学校指導要領生活科の解説では、小学校に入学した児童の学校生活への適応を進めるためにスタートカリキュラムを編成し、生活科を中心とした合科的な指導を積極的に行うことが示されている」と教科の特性上から生活科を中心としたスタートカリキュラムを行うことへの期待を述べている。

例えば、生活科として泥団子づくりを行う。活動で感じたことや工夫したことなどを国語として伝え合い、算数としていくつ泥団子を使ったか数えるという合科的な指導を行うとする。その際、幼児期の砂遊びの体験の様子を小学校教員が把握していれば、体験をつなぐことができ、より充実したものとなるだろう。

作成したスタートカリキュラムを保育者に見てもらい、小学校教員と協働で検討することで、よりよいものとなるだろう。実際に見てもらうことで、「園では給食の配膳はすべて先生が行っていました」「ほうきは使ったことがない」など活動がどこまでできているのか具体的な姿でイメージをつなぐことができるため、内容がより子供たちに即したものとなってくる。

筆者が平成29年度に小学校1年生を担当していたとき、入学後の環境の変化による子供たちの不安により、落ち着いた生活が送れない様子があった経験から、実現の際、やはり子供たちが安心して学校生活を送れているかということを見取ることが大切だと考える。『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム』の中で、「幼児期の教育は、『環境を通して行う教育』を基本としており、教職員に支えられながら幼児が自分の力で生活をつくっていけるよう環境を



構成している。小学校において、環境を構成するに当たっては、児童の実態を踏まえること、人間関係が豊かに広がること、学習のきっかけが生まれることなどを大切に、児童が安心感をもち、自分の力で学校生活を送ることができるように環境を見直すことが求められる<sup>16)</sup>と安心感がもてるように環境を見直すことについて述べられている。

子供たちの様子を見ながら、環境を整え、安心した学校生活が送れているのか、子供たちの様子を十分に見取りながら実現していく必要がある。

安心感があるからこそ、学びが充実したものとなってくる。そのうえで、幼児期までの「学びの体験」を生かした授業を行っていくことで、より子供たちが意欲的に取り組むことができるだろう。

だが、小学校教員だけの見取りでは不十分である。そこで、幼児期までの子供の様子を十分わかっている保育者を参観に招き、見てもらうことが重要だと考える。

『発達や学びをつなぐスタートカリキュラム』の中で、「4月の授業を参観した園の教職員と、児童の姿や指導の在り方について気が付いたことを話し合う機会をもつことで、園での様子と比較しながら児童の状況を把握したり、成長を実感したりすることができる。園と小学校の教職員が顔の見える関係であることは、保護者の安心感にもつながる<sup>17)</sup>」と保育者が小学校の授業を参観することの利点について述べられている。

保育者を参観に招くことは小学校教員が日々の指導の在り方を評価してもらい、今後の指導に生かすことができるというよさだけでなく、保育者や保護者にもよさがあるということである。また、子供たちにとってもお世話になった保育者が見に来てくれ、声をかけてもらえたら嬉しいだろう。

また、3学期には、今年度のスタートカリキュラムを検証し、次年度に生かすことで、改善を図ることができる。そこでも、保育者の意見を参考にすることがよりよい改善につながっていくだろう。

## V おわりに

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにして子供を見取ること、また、保育目標やクラス目標を知り、保育の様子を見ることで保

育者の願いを理解することができることが明らかとなった。

また、保育の現場での事例の分析から接続の視点について明らかとなった。特に「学びの体験」をつなぐこと、生活をつなぐことは重要である。これこそがアプローチカリキュラムとスタートカリキュラムを同質なものとしてつなげることなのではないだろうか。幼児期の教育文化を小学校とつなげるために、学びと生活を一体化した指導観を大切にしていきたい。

これらは、実際に保育の現場を見たことにより気付くことができたものである。筆者のように何度も保育の現場に赴くことは難しいかもしれない。しかし、10月14日に園長先生が「小学校の他の先生にも保育所に来て保育の様子を見ていただきたい」と話されていた。電話だけでなく、直接顔を合わせて話をすることで徐々に保育者との信頼関係が生まれ、連携を生かしていけるだろう。小学校側からの一方的な要望を園に押し付けるのではなく、保育の様子から学び、子供のよさをつないでいくという姿勢が大切である。

12月22日、園長先生が「安心感を子供たちがもてるように保育を行っている」と話されていた。筆者自身も「安心感」を大切にしているため、それを聞いたとき、立場が違っても、子供への思いは共通しているという実感がわいた。これからも幼保小連携について研究を続け、研鑽を積んでいきたい。

【註 及び 引用・参考文献】

- 1) 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）文部科学省 2022年 p. 10
- 2) 上掲書 1) p. 10
- 3) 前掲書 1) p. 24
- 4) 汐見稔幸/無藤隆「保育所保育指針 幼稚園教育要領 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 解説とポイント」ミネルヴァ書房 2018年 pp. 46-47
- 5) 酒井朗/横井紘子「保幼小連携の原理と実践」ミネルヴァ書房 2011年 p. 110
- 6) 上掲書 5) p. 179
- 7) 前掲書 1) p. 5
- 8) 汐見稔幸/中山昌樹「10の姿で保育の資質を高める本」風鳴舎 2019年 p. 4
- 9) 仙台市教育委員会『「スタートカリキュラム」のすべて」ぎょうせい 2010年 p. 156
- 10) 宗形潤子「小学校生活科の砂遊びが入学間もない子どもの居場所づくりにもたらす影響」日本生活科・総合的学習教育学会『せいかつか&そうごう』第26号 2019年 pp. 48-57
- 11) 長瀬美子/田中伸/峯恭子「幼小連携カリキュラムのデザインと評価」風間書房 2015年 p. 85
- 12) 前掲書 8) p. 110
- 13) 岡花祈一郎/津川典子/七木田敦「遊びを中心としたアプローチカリキュラムの可能性」広島大学大学院人間社会科学研究科附属幼年教育研究施設『幼年教育研究年報』第38巻 2016年 pp. 15-23
- 14) 上掲書 13) p. 21
- 15) 前掲書 13) p. 21
- 16) 文部科学省 国立教育政策研究所教育課程研究センター「発達や学びをつなぐスタートカリキュラム」学事出版 2018年 p. 53
- 17) 上掲書 16) p. 65